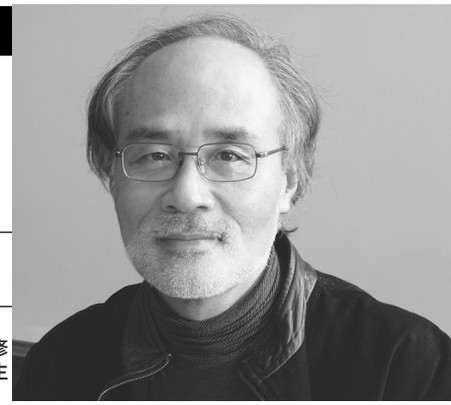
視点

迷いながらも大学に進むのは「自分で学ぶ」を学ぶため

●インタビュー
小林康夫　東京大学大学院 総合文化研究科 教授



こばやし・やすお●1950年生まれ。1968年，東京都立小石川高校卒。74年，東京大学教養学部卒。東京大学大学院人文系研究科博士課程修了，パリ第10大学で博士号取得。専門:表象文化論，現代哲学。「共生のための国際哲学交流センター(UTCP)」拠点リーダー。著書多数。

不況が深刻化する中、4年制大学の進学の費用についての相談が増えている。中には、進学を諦めたり、費用が比較的低く抑えられる短大や専門学校に切り替えるケースも出ているようだ。今の受験生は、過去に比べて、「なぜ4年制大学に行く必要があるのか？」という疑問を強く感じる機会が多いのかもしれない。

今の時代、大学進学とはいった い何なのか。こんな哲学的な疑問を、東京大学大学院総合文化研究科の小林康夫教授にぶつけてみた。

小林教授は、ベストセラー『知の技法』をとりまとめた人物であり、NHK「爆笑問題のニッポンの教養」の誕生のきっかけを作った人物。その小林教授は、大学に進んで学ぶことは、「自分で学ぶ」ことを学ぶためだと言う。

専門教育を急ぎ大学らしくなくなった

――短大や専門学校ではなく、4年制大学に行く価値というのは、どんなところにあると思われますか？

小林　かつては、学生側にも大学側にも、4年制大学には2年間の教養課程があるということが認識されていましたよね。少なくとも、僕が大学に入った1968年頃の4年制大学の受験生たちは、専門課程を受けるには、少なくとも2年間は教養課程を受けなくなくてはならないと分かっていたように思う。それに、4年制大学に行くのは、教養課程を受けるためでもある、と了解しているところもあったと思う。

ところが、この姿が時代の流れとともに変わっていったんですよね。大学も学生も、専門教育を急ぐようになった。特に理系の研究者たちが教養2年・専門2年の学部教育モデルでは、国際的な競争に勝てる専門家を育てられないと訴えるようになった。学生たちも右肩上がりの時代ではなくなってきた頃から、将来の安定につながる専門知識を早く教えてほしいと求めるようになりました。

そして1991年の大学設置基準の大綱化で、制度的にも専門教育を学部1年生からできるようになると、専門教育シフトが一気に強まったんです。

だけど、こうした変化が進行する一方で、大学が本来持っていた重要な要素が失われていきました。21世紀に入って数年が経った今、大学関係者の間で「専門教育シフトが少し行き過ぎていないか」か、「もっと教養教育を重視する必要があるのではないか」という声が次々にあがってきた。専門教育にシフトしてきたけれど、「気づけば単なる専門家教育の集まりになっているだけではないか」「大学という場所だけが持つ特性がむしろ殺されているんじゃないか」というような反省が、今多くの大学関係者の間でできつつあるような気がします。

やっぱり大学という場所には、今も昔もこれからも教養教育をするという機能が必要ですし、その役割をなくせば大学ではなくなるんですね。そのことにようやく気付いたんです。

確かに、古典的な大学の姿そのものは今の時代には通用しないかもしれません。だけど、大学が昔から担っていた役割の一つ、いわゆる教養を身につける場の提供という古典的な理念を捨て去ることは決してできないんですね。

今の大学に求められているのは、高度な専門家を短期間で養成すると同時に、グローバルな教養を備えた国際人、僕の言い方をすれば地球的な視野を持った「地球市民」を育てることだと思います。ある意味で矛盾するこれらの教育を大学は時代の要請として応えなくてはならないのですが、十分に応えられている大学はまだ1つもないでしょう。

日本の大学は今、教育という面で暗中模索の最中。だから、受験生にしてみたら、4年制大学にわざわざ進学する意味が見えづらくなっている面があるのかもしれませんね。

刺激的な対話を生み出す力を養う場

――東大の教養教育は、今どうなのでしょうか？

小林　ほとんどの国立大学が教養学部を潰したなかで、この東大だけは教養学部を死守しましたよね。東京大学に入った学生は、全員がいったん駒場キャンパスの教養学部に入り、教養教育を中心に学び、3年生で専門の学部に進む。この教養教育をいかに現代に適合した形で活性化するかが、東大駒場キャンパスにとって重要な使命の1つなのだと思っています。

――NHKの番組で、お笑い芸人「爆笑問題」が東大に来て教養学部の教員や学生と討論する番組が06年にありました。小林先生は司会進行役を務めるなど中心的な役割を果たしていらっしゃいましたが、あの番組に参加したのも東大の教養を現代に適合する試みだったのですか？

小林　少なくとも僕の心の中では、東京大学が持つ教養が爆笑問題さんのようなシャープに尖った人たちと対話できる能力を持っていなければダメだ、という感覚を強く持っていたのは確かです。

実は、あの番組の企画を最初に持ちかけられたとき、収録する場所はまだ決まっていませんでした。そこで僕は東大の教養学部に爆笑問題が来るという形なら協力するって言ったんですね。あの2人を特別講師として招き、教養学部の教員や学生と語る。大学は社会に対して開かれているべきだし、テレビや漫才の世界にもちゃんとつながって対話ができる教養が東大にあるかどうかも試したかった。

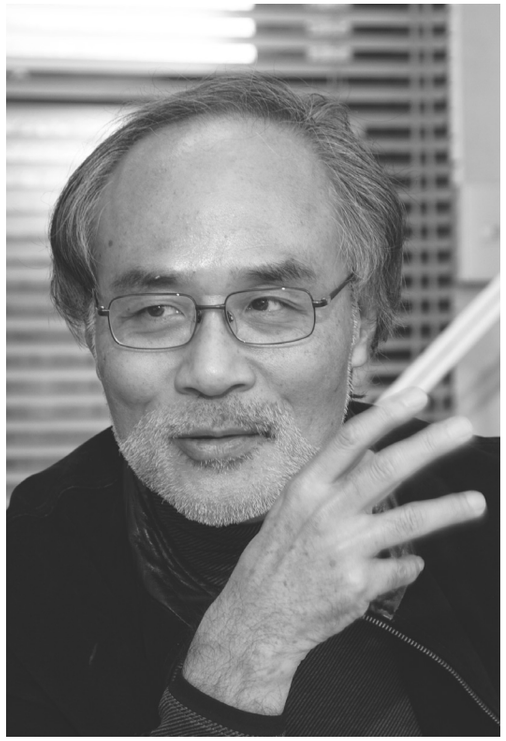
もし、同じ内容をテレビ局のスタジオでやったら、つまらなかったと思う。やっぱり大学内でやったからこそ成功した。会場となった講堂は大いに盛り上がったし、東大の教員も学生も爆笑問題と討論できた。NHKはその後、爆笑問題がさまざまな研究者を大学などに訪問する番組をレギュラー化しましたよね。制作側も手応えを感じたんだと思います。

教養って、誰が相手でも知的で刺激的な対話を成立させられる力のことなんだと僕は思うんです。相手がピカソのことを持ち出したら、こちらは単なる知識で返すのではなく、その思いを受け止めつつ相手が震えるような知的な何かを返してみせる。それが本当の教養の力。対話そのものを創造的な営みに換えてくれるものこそ、教養なんだと思うんです。

知識を持っているということよりも、その知識を使ってどんなふうに話ができるか。これからの大学がすべきことの一つは、そんな対話を学生たちと一緒にいろいろな人たちとしていくことなんだと思います。

――今の社会に対して、大学だからこそできることは何でしょうか？

小林　大学は、人間にとって極めて重要な場所です。これからの社会でますます重要になってくると



思いますね。なぜなら、利益なしに国際的に相互に交流し合いながら、現代的な共通の課題に専門的に取り組み討議できる場は、大学以外にあまりないと思うからです。

しかも、大学は、いかなる国家権力や宗教に従属することなく、学生が成長することを社会的に保障できうる場でもある。大学なら世界各地にあって、同じような問題をみんなで対等に討議していける。この力をフルに使うことが、大学の新しい展望を開くと思うし、その中から社会的な難問を解決する糸口だって提案できるようになると思う。

大学は決断の猶予を与え迷う自由をもたらす

――不況が深刻化しています。大学を出ただけでは、昔のように安定した生活には直結しません。今、多くの費用と努力を費やしてまで大学に進学することについて、どう考えたらいいのでしょうか？

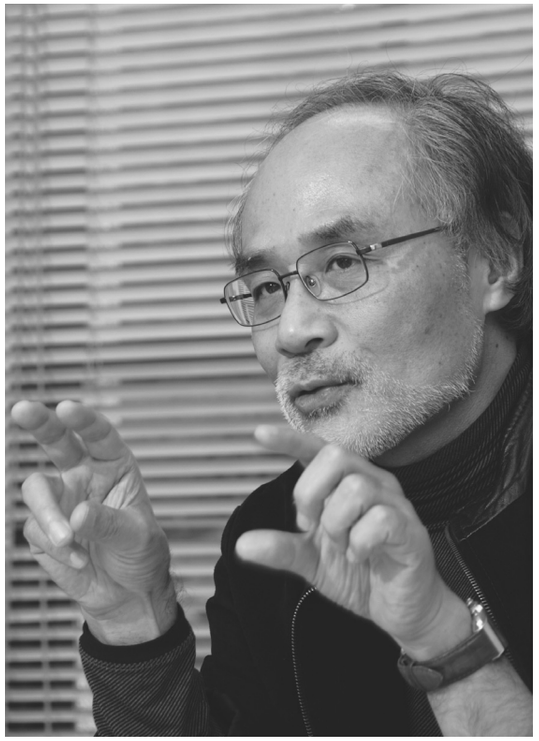
小林　少し前まで「大学に行けるなら行ったほうがいい」という標準的な考え方があったんですよね。だから、大学進学率は上がり続けたんだと思います。でも、これからの時代、そんな標準コースは立ち行かなくなるような気がします。

実際、若い人たちは大人たちよりも分かっていますよ。僕はあまり感心しないけれど、ダブルスクールで公認会計士を目指すような学生は増え続けている。大学を出ただけでは自分の能力を十分に発揮できない、ということを多くの若者が認識しているんです。

このような動きに対して、大学やその他の学校がどう対応するか。大学が学生に資格をたくさん取れるようなサービスを始めるのか。あるいは大学以外の学校が大学ではできない教育をして若者を集めるのか。実際どうなるか分からないけれど、大学一辺倒にならなくても僕は良いと思う。

もっと多様な進学の形があって、もっと多様な学び方や生き方があり得る社会にしたほうが、長い目で見たときには良い点が多くなると思う。先ほど、大学は国際社会の中の教養センターのような役割をもっと担うべきだと言ったけれど、若者全員がそのセンターに入る必要はないわけですから。

――大学進学に明確な目的を見出せない高校生は、大学を目指すのをやめたほうがいいと思われますか？



小林　いいえ、そんなことはないと思いますね。大学に入れば、人生的な選択を猶予する期間が得られますから。

実は、この猶予は教養を学ぶことと結びついていて、僕に言わせれば、教養というのは最終的には人生の決定に猶予を与えるものでもあるんです。人は、ときに猶予が必要です。特に若者が将来について重大な決定をするときはそう。迷う自由が与えられるべきなんですね。その迷うことをより良くするために必要なのが、教養と時間で、この2つが若者に与えられるという意味でも、大学という制度はとても有意義なんです。

大学に入るまでに将来の職業を考えたほうがいいという考え方もあるかもしれませんが、現実的にはなかなか18歳で決めるのは難しい。大学には本来的に迷える若者に猶予の余裕を与える機能を社会的に制度設計されている面があるんです。将来の道が見えなくても、大学生になれば雑多な物事が錯綜する複雑な場所に入り、そこには多様な人間や社会や歴史があって、その中で生きていくのに必要な教養を身につけられる。将来について悩んだり、迷ったり、トライ&エラーをしながら自分の人生に意味づけを始められる。

僕自身こそ、この大学の猶予の余裕を利用した人間ですよ。東大の理科一類に合格してノーベル物理学賞をとろうと意気込んで入学したのですが、いろいろあって2年留年し4年かけて教養課程を終えて、3年生の専門課程で専攻の学部として教養学部を再び選びフランスの文学や哲学を学んだんです。だから自信を持って言えます。迷いながら必死にトライ&エラーを繰り返すことは良いことだとね。

「自分で学ぶ」を習慣化できれば終わり

――迷う猶予が与えられれば、必ず自分の道を見つけられるものなのでしょうか？

小林　見つからないことのほうが多いと思います。でも、それでいいんです。もっとも重要なのは、猶予期間内に「自分で学ぶ」ということを学ぶことなんです。

高校までの学びは、範囲がきちんと決まっていて、学ぶ方法も評価の方法もほぼ決まっている場合が多いですよね。しかし、大学は違います。真に学ぶべきことは、言ってみれば1つしかありません。授業やゼミや研究やフィールドワークなどを通して、「自分で学ぶ」ということがどういうことなのか、正しく自分なりに分かればいいんです。それが分かれば、極端なことを言えば大学が教えることはもうありません。

細かいことを言うと、同じ理系でも、数学を学ぶのと物理学を学ぶのと化学を学ぶのと遺伝子工学を学ぶのとでは、学び方は全部違ってきます。フランス語を学ぶのとフランス文学を学ぶのとでは、やはり学び方が違いますし、学ぶ人によっても学び方は異なります。学び方は対象によっても異なるし、学ぶ人によっても異なります。肝心なのは、自分なりに「こうすれば、こういうふうに学べるんだ」という〈技法〉というか〈やり方〉をつかんで、それを日々の生活で実践できる習慣を身につけることなんですね。

大学というのは、必ずしも専門知識を身につける場ではなくて、「自分で学ぶ」ことを学ぶ場なんです。これは、迷っている若い人もできますし、「学ぶ」ことを学べた人はどこでも通用する。堂々と社会に出て行けます。

――不況の影響で大学進学の費用を工面できない高校生も出てきています。経済的な理由で大学進学を断念せざるを得ない生徒がいたら、小林先生は何と声をかけますか？

小林　今の高校の現場では、そんな事態が増えているんでしょうね。高校生によっては大学進学だけが社会に出るための門戸のように見えるかもしれませんから、動揺は大きいかもしれません。

しかし、世の中は生徒が思う以上に多様です。決して一元的ではありません。大学に進学したくてもできない生徒には、まず「この選択が人生のすべてを決めるわけではない」と言って、僕なりに希望を語り続けたいですね。

実際、大学に進む以外にも、豊かで自分を成長させてくれる道はたくさんあります。大学に行けば自由を得られるかもしれないけれど、大学の外だって若いなら何度でもやり直せますよ。18歳でベストな選択をする必要はどこにもなく、とりあえず選べる選択肢をできる限りたくさん見つけ、とにかくやってみる。

どんなに不況でも、若いなら必要に応じて軌道修正するチャンスは得やすいんです。生き方次第で敗者復活戦はたくさんできるし、いろいろな形で迷ったり間違えたりすることが人間の豊かさにもつながる。どんな状況も、自分の意思と努力で変えられることを伝えたいですね。

若い人にとって重要なのは、何かを求め続けることです。求め続けるということは、それは学び続けるということであり、希望を持ち続けるということでもあるんですね。何かを求め続ける大切さを高校生に教えたいですね。それができたら、きっと卒業後も希望を持って自分から学び続ける人になってくれるはずです。

『知のオデュッセイア』
（小林康夫・東京大学出版会）
小林教授が漂流するように自然科学やアートの先端を走る専門家たちと対話。〈人間〉についての新しい思考を探す教養のためのダイアローグ。